

# 会員企業探訪

## 本の世界を 立体的に提案 革新の 書店経営

アルトスブックストア 代表 西村 史之



持続化補助金を利用して改装した外観。  
覗き込めば「どんなお店？」とワクワクさせてくれる



本屋だからと、ただ並べるだけではない。  
この日は、くつ下ブランドのPOPUPを開催中



お店オリジナルのブックスタンドに、  
本が並ぶ様子はインテリアとしても美しい



ハーブシロップと本というように、リンクさせることで、  
より興味を持ってもらえるような仕組み

### 経営理念

「変わらず、続ける」を経営理念に、  
「衣食住」をテーマに暮らしに寄り添う本を  
取り揃えています。

### 街の本屋から ライフスタイル提案型書店へ

南田町バス通りの一角に店を構える「アルトスブックストア」。他の書店とは異なるユニークな経営が目立れば、雑誌や書籍などに取り上げられることも多く、2012年にはシリーズ本「世界の本屋さん2」に国内7店のひとつとして選定され書店業界からも熱視線を集める店である。経営者の西村史之さんは現在52歳。前身である「西村書店」を父親が開業した年に生まれ、店の盛衰との重ね合わせのような人生を歩んできた。

創業は1966年。東京暮らしだった父親が帰郷し、洋書を扱っていた前職の経験から書店を開こうと決めた。世の中は好況で本や雑誌はこれから伸びると見込んでの創業だった。当初はいわゆる街の本屋さん。週刊誌、雑誌、マンガ本などが店頭を飾り、客足も多かった。しかし良いときは続かない。近隣の郊外型書店の進出、コンビニ店の急増、そしてインターネットでの通販の時代になると、街の小さな本屋としては立つ瀬もない。西村さんが経営を引き継いだ1993年頃はすでに厳しい状況で、他界した父親が残した病院やスーパーへの卸し商や固定客でしのいでいく日々が続いたという。

「このままでは先が見えていない」と危機感を感じつつ、どうすればいいのかと自問した。そして出した答が「本」という。自分の足元を見よう、暮らしの質を良くしようという狙いだったが、最新のトレンドは、すぐには受け入れてもらえるものではなかったと振り返る。

「当時の松江は保守的な部分もあり、興味を持ちながらも遠目だろうかという感じで、来店する人は少なかった。どうしたらこのスタイルをわかってもらえるか。そこでワークショップを試してみました」

### ワークショップ、店内ライブが 店の個性をつくる

当時、都心などで書店がワークショップを行う例があり、これならできるかもと市内カフェのバリスタを招いてコーヒーの淹れ方教室を開催。これが好評だったことから、リース作り、消しゴムはんこ作り、ブックカバー作りの教室などを次々に開催。ワークショップを楽しむファンも増え、店の個性化につながった。また西村さんの好きなミュージシャン（ハンバート・ハンバート、おおはた雄一、友部正人、坂本美雨他）を招いての店内ライブも話題となり、多いときは50人も店内に入ったというから驚く。

「ライブではミュージシャンのファンも県外からやってきます。すると口コミで変わった本屋さんが松江にあると広がったようで」と次第に店の存在が知られ、地方でこのようなスタイルを持つ書店が少なかったこともあって雑誌などでも頻りに紹介されるように

と雑貨が融合する提案型の書店」という大胆なものだった。

### 「衣食住」をテーマに 本や雑貨、食品も

2005年「アルトスブックストア」としてリニューアルした店舗は、前面ガラス張り。店内には高く平積みされた本はなく、表紙がよく見えるようにゆったりと棚に並ぶ。本が自らの存在をアピールするようなディスプレイが面白く、思わず手に取ってしまう。本のジャンルは「衣・食・住」。書店側の嗜好が表れる書籍が多く、大きな書店では見過ごしがちな本も、ここでは幸せそうに棚に納まる。時代が潜在的に求めるものを提供したいと、期間限定で開催される企画展。壁や棚にもパンケーキ粉、ハチミツ、コーヒー、オーデイオなどがさりげなく置かれる。もちろんどれも売り物だ。

「父親の代からずっと経営については我流です。リニューアル後は、妻も経営に参加するようになりましたが、妻は本屋の経験がないため、どうする？というところで、自分たち二人が興味のあるものを提案する店にすれば、なんとかなるんじゃないかと」と衣食住にテーマを絞ったいきさつを語る。

店名の「アルトス」はギリシャ語でパン。ここで提案する本が心の糧となればとの思いから付けた。衣食住をテーマにしたのは、パブルの狂騒から一転、時代がスローライフ、ロハス的なものに風潮が変わったことにもあり、知る人ぞ知る個人的な書店として、全国に認知されるようになったという。

また活躍の場は店内だけでなく、市内のホテル、安来市の温泉旅館や県立美術館などの書棚や書斎スペースの選書（ブックコーディネート）なども行い、様々な業種との接点も広がる。

「本屋だからいろいろな人が来ます。この店で今まで全く関わらなかったジャンルに気づき、発見する楽しさを知っていただけたら」という。

西村さん夫婦が来店客と会話することも多いというのも他の書店と大きく違うところだ。雑貨を扱うゆえに店側の気持ちを知らなくてもいいと思いがちだが、そこで話がかみあう面白さ、様々な知見に出会えることも楽しいという。

今後については「とにかく続けていくことが第一」という西村さん。「いつ来ても変わらないけれど、いつも面白いと思われたい」と語ってくれた。

